プロジェクト報告

アンデス社会と市場概念の再定位：擬制商品化を超えて「生命力」を基軸とする経済学へ

大　貫　良　史

1．はじめに

本研究の目的は、資本主義的制度を部分的あるいは全面的に欠いている社会の経済分析を通じて、経済過程における自然の諸力が果たす役割とその在り方を認識し、構築していくことの意味と必要性を論じることである。

近代経済学は、市場を自律的・普遍的な調整装置として理解してきたが、この理解は自然と社会に対する人為的な抽象化に基づいており、その有効性には限界がある。21世紀における環境危機や気候変動の現実は､その限界を露わにしたともいえる（ポランニー2003、2009）。

アンデス共同体のような伝統的社会が、資本主義経済から全く無縁かつ影響を受けていないということはありえない。程度の差こそあれ、どの共同体も資本主義や市場経済を受容しつつ伝統的価値観との共存を図ってきた。

伝統的アンデス共同体への資本主義の影響の存在は、様々な研究において以前から指摘されている（Lehmann 1982）。とはいえ、それまで資本主義外に位置すると考えられてきた伝統的価値観に基づく関係、例えば互酬制やコンパドラスゴ（代父母制）などがむしろ搾取的に働き、優位な側の資本蓄積に寄与したケースもある。儀礼的親族関係や仲介者の存在は、経済を単なる物的交換の次元に還元できないことを示している。こうした制度は、一方では相互扶助や社会的統合を可能にするが、同時に権力や搾取を媒介する装置としても機能するなど、その程度や形態は多様であり、抽象的な理論モデルの適用や一般化などできるものではない（Lehmann 1982）。

伝統的アンデス共同体内における経済を理解するには、「非資本主義的」対「資本主義的」という二分法では不十分である。両者の関係は多様であり、地域ごとに異なる歴

史的・文化的条件の下で独自に形成されており、アンデス社会は伝統的交換関係と市場経済とが接合しつつ、異なる道を歩んできたのである。

多様な歴史的編成の在り方を具体的に分析しつつ、資本主義の浸透と伝統的共同体社会の反応を実証的に検証していくという点で、リーマンらの研究は重要である。しかしながら、他方で、このような視点の分析は、あくまで経済学の範疇において彼らの行動を相対化しようとする試みであり、今必要なのはむしろ経済学の範疇を超えた分析視点なのである。

本稿では、まずカール・ポランニーの市場社会批判を出発点とし、現代経済学の構造的な問題を整理する。さらに「進歩の時代」から「レジリエンスの時代」への転換の必要性を論じながら、アンデス社会の共同体的世界観から、商品化や数値化に収斂されない経済学の可能性を展望する（リフキン 2023、ボヌイユ 2018）。

2．ポランニーの市場社会批判

カール・ポランニーの『大転換』は、ファシズムや第二次世界大戦といった破局の原因を探る試みであり、その核心は18世紀後半のイギリスで誕生し世界へと拡張した市場社会の限界にあった。ポランニーにとって「市場社会」とは資本主義社会そのものであり、その根本的な問題は「自己調整的市場」という古典派経済学の前提がユートピア的虚構である点にある（ポランニー 2009）。

自己調整的市場が成立するためには、人間は常に経済合理的に行動する「ホモ・エコノミクス」であり、労働・土地・貨幣が自律的に取引される必要がある。しかし、実際には、これらはもともと市場での取引を目的として生産された商品ではなく、ポランニーの言う「擬制商品」に過ぎない。市場社会は、国家による制度設計と経済的自由主義という思想によって人為的に構築されたものであり、自然発生的な秩序としての市場という古典派経済学の描像とは矛盾しているのである（一井 2009）。

この矛盾は、社会そのものを市場の論理に適合させようとする過程において顕在化していく。労働・土地・貨幣といった領域に市場原理を持ち込むことは、社会を根本から変容させ、人間や自然を「労働」「土地」のように商品として扱う制度的フィクションを生み出した。

市場原理の拡張に対して、社会は防御的に規制や保護を求め、この矛盾の激化が、20世紀前半のファシズムや戦争の背景となったという。20世紀の危機をポランニーが「市場社会の破局」と捉えた所以はここにある。

したがって、我々が今日直面している危機の本質を理解するには、市場社会と異なる

社会の論理、すなわち市場社会の周縁に位置づけられるアンデス社会のような伝統的社会の分析が有効だと考える（Allen 1988、Murra 1975）。

3．合理的経済人モデルの問題

現代経済学の基礎をなす新古典派経済学は、限界革命以降、個人の効用最大化行動を前提として理論を構築してきた。しかしこの「ホモ・エコノミクス」像は、人間を社会的・文化的文脈から切り離し、自然との関係を無視するものであった。実際の人間行動は利他性や慣習、共同体的規範に規定されており、純粋な合理性に還元することはできない。

さらに、経済学は熱力学的な「エントロピーの法則」に無自覚であり、有限なエネルギー資源の消費による長期的損失を捉えきれていない。GDP のような指標は短期的な交換価値しか測定せず、自然資源の枯渇や環境破壊といった不可逆的コストを無視してきた。

このことは、産業革命以降の経済思想の変化とも関連している。重農主義や古典派経済学は、自然を富の源泉として一定の重要性を認識していたが、産業革命による工業化と新大陸の発見とそれに伴う広大な土地へのアクセスによる天然資源の潤沢化から、自然の利用が比較的安価なものと認識されるようになり、自然は単なる生産要素へと矮小化された。だが実際には、化石燃料の大量消費は過去の蓄積を切り崩す「未来への負債」であり、経済学が前提とする平衡的循環モデルはこの不可逆性を説明できない（桑田 2014,2023、玉野井 1978、マルチネス 1999）。

4．進歩から適応：レジリエンスの時代へ

近代は「進歩の時代」として認識されてきた。科学技術の発展と経済成長は、人類を無限の可能性へと導くと信じられてきた。しかし、環境危機と資源的制約は、この進歩観を根底から揺るがしている。このような背景のもと必要となるのは「レジリエンスの時代」への転換である。

レジリエンスとは、単にショックから回復する能力ではなく、環境変動の中で柔軟に適応し、新しい秩序を生み出す能力を意味する。人類が地球との関係を収奪から再調和へと転換するには、効率性の追求を相対化し、持続可能性と適応性を重視する新しい経済学的枠組みが不可欠である（稲村編 2022）。

この転換は、一般均衡理論や GDP といった近代経済学の基盤的概念を問い直すこと

を含む。一般均衡理論が描く静的な均衡像は、実際の複雑系としての経済を捉えられない。GDP のような指標も、豊かさを貨幣的価値に還元するに過ぎず、環境的・社会的コストを反映しない（Stiglitz, Sen and Fitoussi 2009）。自然を資源ではなく「生命力」として捉え直し、人類が生態系の一部にすぎないことを認識し位置づけるような「生態経済学」的枠組みを考える必要がある。これはポランニーの「経済は社会に埋め込まれている」という視点と呼応する。

5．アンデス的世界観と「精神性の経済学」

アンデス社会の共同体は、土地や自然との強い愛着を基盤に成り立ち、共有資源を共同管理する仕組みを持つ。これはオストロムのコモンズ論とも重なり、環境の再生能力を維持しながら生活を営む在来知に基づく慣習である（オストロム 2022）。またパチャママやアプ信仰に象徴されるように、自然は単なる資源ではなく、時に魂を宿す存在として畏敬の念をもって扱われる（岡本 2025）。

人と場所とのあいだには容易には断ち切れない絆があり、どの社会においても、人々は身近な場所や生態系への深い愛着を抱きつつ、コモンズを共同管理し、経済・社会生活・統治を一体として築いてきた。人びとは生物圏の季節的・年次的な再生の範囲内で生きることによって、その再生能力を維持してきたのである。これは、鳥塚が指摘する「土地と記憶の一体性」とも通じる（鳥塚 2024）。

人生は時間の流れの中で営まれるものである一方で、場所に対する愛着は人びとの世界観を形づくり、各自が自分の人生を生きるための拠りどころとなる物語を大きく規定している。したがって、地域住民やコミュニティが環境や自然界とどのように関わっているのかを理解することがきわめて重要である。

こうした価値観は、商品化や数値化に馴染まないものであり、擬制商品化の対極に位置するといえる。この「精神性の経済学」とも呼ぶべき視点は、経済学が取りこぼしてきた愛着や共感、生命愛（バイオフォリア：リフキン 2023）を重視するものである。それは、人類が自然界の一部として生きるための倫理的基盤となり得る。

共感力や生命への愛着は、今後の経済や社会のあり方を再考するうえで不可欠な要素となるだろう。アンデス世界に目を向け、パチャママやアプなどの自然信仰思想に触れると、モノや自然に対する畏怖と愛着が「物には魂が宿る」という考え方と結びついていることに気づく。魂が宿るとみなすからこそ、人はそれを大切にし、畏敬の念をもって接し、粗末に扱ったり「失われても代替物で補充すればよい」とは考えなくなる。このような行動は、人類が長い時間の中で培ってきた、自然と調和し共生するための知恵

であり、まさに在来知の一形態といえる。

また、この発想は「取引できない、したくないもの」という意味で、ポランニーが批判的に論じた擬制商品化の対極に位置づけることも可能である。こうした観点から「精神性の経済学」という概念は、現代社会に対して批判的かつ創造的な示唆を与え得る。

既存の経済学は、基本的に貨幣や数値、すなわち交換可能な価値を中心に構築されてきた。人間の行動を「効用」という概念で説明することはあっても、それは経済的価値の枠組みの中に限定されている。そのため、神聖性や土地への愛着といった数値化できない価値を十分に扱うことができない。グデマンがコミュニティ経済の研究で示したように、経済は市場的論理と共同体的論理の二重性をもち、後者はしばしば交換価値に還元できない関係性によって維持されている（Gudeman 2001）。また、デスコラが論じるように、西洋的な自然と文化の二分法を超える枠組みが求められるのである（デスコラ 2005）。

たとえば、ある農村の景観やアウサンガテ山のような聖なる存在を大切に思う人がいても、開発を望む主体が現れれば、市場経済的発想では「開発されたくないなら買い取ればよい」という需給関係に還元されてしまう。だが、こうした交換価値への一元的な置換は、土地や自然に宿る精神的・象徴的な価値を切り捨ててしまう。この点で、経済学が数値化や交換可能性に偏りすぎることは根本的な問題を孕んでいる。むしろ、アンデスの「魂が宿る世界観」に代表されるような在来知を認識することによって、経済学は交換価値ではとらえきれない倫理的・象徴的次元を取り込み、新たな方向性を模索することができるのではないだろうか。

一方、自然信仰というと、しばしば「アニミズム」という語で語られることがある。しかし、ここで論じる自然信仰は、それとはやや異なる性格をもつ。内山は次のように指摘している。

「アニミズムはすべてのものに霊魂が宿る信仰を指している。それはすべての信仰の基盤ではあるが、やがて多神教へ、さらには一神教へと発展していくという「発達史」をともなって語られた言葉であり、まさに「原始文化」なのである。ヨーロッパからみた「原始文化」観なのであり…」（内山 2010：102）。

アンデスにおける自然信仰は、そのような原始文化的コンテクストに閉じ込められるべきものではない。むしろ、人間と自然との共存のために培われた知恵として高度に昇華され、独自の到達点として現れているものなのである。

6．研究の今後の課題

今後の課題としては、コムニダにおける互酬性や共助の実態を明らかにすることである。表面的には村落共同体の形をとりながらも、精神的な共同性がどの程度維持されているのかを検証する必要がある。その上で、先住民の行動や思考の論理を理解し、現代経済学の理論的枠組みに欠けている視点を補完していくことを目指す。

また、コモンズ論、経済人類学などの批判的経済学との対話を通じ、資本主義経済の内在的矛盾を再考し、地球生命のリズムに則した再生的循環型の経済モデルを模索することが重要である。

参考文献

Allen, Catherine J.（1988）*The Hold Life Has: Coca and Cultural Identity in an Andean Community*. Smithsonian Institution Press.

Gudeman, Stephen.（2001）*The Anthropology of Economy: Community, Market, and Culture*. Blackwell.

Lehmann, David（ed.）.（1982）*Ecology and Exchange in the Andes*. Cambridge University Press

Murra, J. V.（1975）*Formaciones Económicas y Políticas del Mundo Andino*. Lima：Instituto de Estudios Peruanos.

Stiglitz, Joseph, Sen, Amartya and Fitoussi , Jean-Paul.（2009）*Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress*.

稲村哲也［ほか］編（2022）『レジリエンス人類史』、京都大学学術出版会

一井昭（2009）『ポリティカル・エコノミー：『資本論』から現代へ』、桜井書店

内山節（2010）『共同体の基礎理論：自然と人間の基層から』、農山漁村文化協会

岡本年正（2025）「現代世界におけるパチャママの二面性」Aoyama Journal of International Studies 12、青山学院大学国際研究センター

オストロム、エリノア . 原田禎夫、齋藤暖生、嶋田大作訳（2022）『コモンズのガバナンス：人びとの協働と制度の進化』、晃洋書房

桑田学（2014）『経済的思考の転回：世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』、以文社

桑田学（2023）『人新世の経済思想史：生・自然・環境をめぐるポリティカル・エコノミー』、青土社

玉野井芳郎（1978）『エコノミーとエコロジー：広義の経済学への道』、みすず書房

デスコラ、フィリップ . 小林徹訳（2020）『自然と文化を越えて』、水声社

鳥塚あゆち（2024）「アンデス牧民の放牧地との関わり方：経験と記憶からの土地認識」、日本ラテンアメリカ学会第45回定期大会口頭発表、慶應義塾大学

ボヌイユ、クリストフ . フレソズ、ジャン＝バティスト . 野坂しおり訳（2018）『人新世とは何か：「地球と人類の時代」の思想史』、青土社

ポランニー、カール . 玉野井芳郎、平野健一郎編訳；石井溥［ほか］訳（2003）『経済の文明史』、筑摩書房

ポランニー、カール . 野口建彦、栖原学訳（2009）『「新訳」大転換：市場社会の形成と崩壊』、東洋経済新報社

マルチネス＝アリエ、ホワン . 工藤秀明訳（1999）『エコロジー経済学』、新評論
リフキン、ジェレミー. 柴田裕之訳（2023）『レジリエンスの時代 ： 再野生化する地球で、人類が生き抜くための大転換』、集英社